

日本IT書紀

12 補追 結

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

12 補追 結

231 終章または序章

232 解題

233 あとがき

231 終章または序章

第二百三十一

終章または序章

一

以下は本書の終章であると同時に、次のプロセスに進む序章として書く。本書の名に援用した『日本書紀』に準じれば、空の向こうか洞窟の奥から聞こえてくる神話・伝承・伝説の時期は終わり、これ以後、肉眼と肌感覚で時の流れを知覚することになる。

一九七九年は、マイクロソフト社、アップルコンピュータ社がそれぞれに、ゼロックス社PARCと交差した年として記憶される。

WYSIWYGの技術を開発しビットマップ・ディスプレイ向けのページ記述言語を開発したチャールズ・シモニーがマイクロソフト社に移籍し、アップル社のステイブ・ジョブズが自社株を担保にPARCのUNIXグループと協力関係を結んだのである。

ここで留意を促したいのは、八〇年代における、時代の寵児¹たちは、本書の軸であるIBM、UNIVAC、バ

ロース、NCR、ハネウェル、コントロール・データといったハードウェア・メーカーでなかったということと、そのスタートラインでそのような企業と深い関係を持たなかったということだ。

ただし、以後のことは本書の対象から外れる。

またこの年、マイクロソフト社とデジタルリサーチ社は日本電気、富士通、ソニーといった日本の電気・電子メーカーにMS-BASICとCP/Mを供給する契約を結んだ。一方、アップルコンピュータ社とソフトウェア・アーティストは東京・本郷にあったESDラボラトリ、BMCIンターナショナルにApple IIとVisicalcを供給することで合意した。日本にパソコンが上陸した年だった。これもまた、本書の領域ではない。

コンピュータとデータ通信が結びついたオンライン・システムは、通信回線の自由化を機にVANに転換し、EDIを経てECに発展する。情報処理機能とネットワークのコモディティ化は異機種間接続システムの敷衍と相まってインターネットに結びついていく。

八〇年代は特定の技術体系を閉鎖的に、様々な条件のもとで利用するレガシーなパラダイムがピークを迎え、その地下水脈としてUNIX、OSS（オープンソース・ソフトウェア）などオープンなパラダイムが確実に勢いをま

していった。

ともあれ、それは神話・伝承・伝説の領域ではない。

神話・伝承・伝説の最後に伝えておかなければならないのは「Hシリーズ」のことである。

——IBM社が他社の追隨を許さない超高性能・超高速の超大型コンピュータの開発を進めている。

という情報が流れてきたのは一九七八年の年初だった。

IBM3031、3033のレベルアップ／リプレース需要を見込んだ後継機を開発するのは何の不思議もないのだが、容易に正体が分からなかった。「Hシリーズ」という開発コード名だけが分かった。

一九八一年の八月、「日本情報産業新聞」の編集長・小俣芳晴は、アメリカのコンピュータ市場の動きについてレポートを書いた。小俣はその年の五月十八日から二十二日まで、ロサンゼルス郊外のアナハイムで開かれたNCC (National Computer Conference) を視察した折、そのついでにフェニックス・コンピュータ・インフォマティクス、カルコンプといったロサンゼルス近辺の企業を取材した。

この当時、日本のメディア関係者でこれほど精力的にアメリカの情報関連企業を取材できた記者はそうそういなかった。まず、英語が堪能でなければならぬ。次にコンピ

ュータ業界のこと、技術のこと、市場のこと……を知らなければならぬ。

ばかりでなく、アメリカの企業が応じてくれなければならぬ。取材を申し込んでも

「Who?」

となればそれきりである。日本を代表するコンピュータ／情報産業にかかるアナリスト、ジャーナリストの一人として知られていなければ、まず不可能に近い。

そこで小俣は大きなヒントをつかんだ。

——IBM社のHシリーズは、IBM3033の数倍、最大で十数倍の処理能力を持つことになるだろう。

IBM関係者には厳しい箝口令が敷かれていたのだが、IBM機で稼働するソフトウェア・パッケージや周辺機器のメーカーに、IBM社は一定の情報を流していた。

二

「NCCの会場では、その年の三月に明らかに変わったアメリカのストレージ・テクノロジー(STC)社買収の話題で持ちきりだった。誰に聞いても、知らない、という答えが返ってくるばかりだった」

と小俣は言う。

なるほど、サードパーティのソフトウェア・パッケージ。周辺機器メーカーに取材すれば、概要が見えてくるかもしれない。

小俣はなおも取材を続け、ついにおおまかなスペックをつかむことができた。帰国して三か月経ってレポートをまとめたのには、そのような事情があった。以下、小俣の記事――。

Hシリーズは来春発表されることは間違いない――今年の秋、という情報もあった。だが、IBM関係筋は「303Xプロセッサは今年中に売り、来年の初めにもそれに代わる超大型機をまず発表する」という。

同筋や信頼できる調査会社の話を総合すると、Hシリーズのコード・ネームは「アディロンダック」といい、H1、H1、H3、H4、H5、H6、H7のプロジェクトがあつて、中・大型から超大型まで七機種で構成される。

注目の超大型機「H7」は二十七MIPS（命令処理百万回/秒）機で、コード・ネームは「センチネル」。四プロセッサから成るシステムといわれている。ちなみにHシリーズは三〜二十七MIPSをカバーするシリーズと言う。

そして、まず来年初めに発表されるのが「H4」といわ

れている。この機種は「イロコイズI」を大幅にアップしたものと見られている。

「IBMは当初、H4をイロコイズIというコード・ネームで、単一プロセッサ方式で開発していたが、今年初めに複数プロセッサ方式に仕様を変更し、イロコイズII年、新たに開発を進めている」（調査会社筋）というのだ。それによると、H4は八MIPSのマスター・プロセッサと四MIPSのスレーブ・プロセッサをシステム・コントロール・ユニットで結合したアーキテクチャーをとっている。またOSであるMVSの一部はエグゼキュート・コントロール・プログラムの中に編入され、I/O関係をスレーブ・プロセッサで専門に処理する形になっている。

記事中にある「八MIPSのマスター・プロセッサと四MIPSのスレーブ・プロセッサをコントロール・ユニットで結合し、入出力処理をスレーブ・プロセッサで専門に行う」というのは、CPUとFEPを本体に取り込んで一体化する考え方だった。これに対応したOS「MVS」の新バージョンも出るという。

この報道から四か月後、日本IBMは新型機「IBM3081」を発表した。HシリーズのH4「イロコイズII」

だった。小俣がつかんでいた「早ければ年内にも」という情報は間違っていないかった。

IBM3081は二つのプロセッサを密結合して、あたかも一つのプロセッサとして動作するデュアル・プロセッサ方式を採用し、それぞれが三十二キロバイトの高速キャッシュメモリとチャネルセットを備えていた。

主記憶容量は十六メガバイト、拡張に際しては最大三十二メガバイトまで、八メガバイト単位で増設でき、処理性能は既存のIBM3033の約二倍、トータル・スループットは十MIPSだった。

富士通は敏感に、かつ鷹揚に反応した。

「性能、価格とも予想した範囲であり、画期的なものではない」

このとき国産勢はどうだったかというと、富士通は対抗機となる「M-380」に、日本電気は「ACOS1000」にほほめどをつけていた。超大型コンピュータの性能競争が始まったときだった。この「大鑑巨砲主義」は、最終的にコンピュータ単体で百MIPSという数字を叩き出すことになる。

のみならずそれは、大手のコンピュータ・ユーザーが超大型機を保有することに価値を見出し、ことに金融・証券業界では一社当たり年間百億円超というはかばかしくも

華々しい大型投資の競争が始まったときでもあった。

リプレース。

がメディアの見出しになった。

このとき多くの人——コンピュータ・メーカーであれ情報サービス会社であれ情報産業専門メディアであれ——は、コンピュータ単体の処理性能に耳目を奪われた。気がつかなかったことがあった。

当のIBM社ですら気がついていなかった。

IBM3081は旧来のIBM3033に対して、設置面積が二〇%、発熱量が七〇%、消費電力は六六%も低減していた。その行き着く先に何かがあるかを冷静に考えれば、あるいはサンフランシスコのシリコンバレーとホームブリュー・コンピュータクラブで起こっていた出来事を、我がこととしてとらえる余裕があれば、分かることだったかもしれない。

ダウンサイジングである。

三

この時期の筆者が何をしてきたかは、すでに書いた。

右も左も分からぬまま動き回っているうち、時の気まぐれで編集の責任者担った。そしてその仕事から離れたいま、

自分がかかわりを持つ前の情報産業のこと、企業や社会のことについて文字を書き連ねている。

確認の作業を通じて、いくつかの発見と驚きがあった。

大福帳のほか記録の方法を知らなかったところに「表」と「統計」の概念を持ち込んだ杉亨二、漢数字をアラビア数字に置き換えた前島密、計算機の原理を独創した矢頭亮二、文献のみを頼りに時計仕掛けのパンチカード式計算機を編み出した川口市太郎。

以上は決して新しい発見でなく、一部において周知・既知の事実である。強いて筆者が気づいたことをあげれば、矢頭亮二、逸見治郎、大本寅治郎の三人が、そろって一八八七年（明治十二）に生まれた、ということである。

あるいはイギリスのガス会社の副工場長だったランチェスターの着想がオペレーションズ・リサーチ（OR）を生み出し、フィラデルフィアを鉄工場に務めていたテイラーの経営手法が、こんにちのERP（Enterprise Resource Planning）の原点となった。

これも特段の発見ではない。筆者が見つけたのは、この二人が同じく「フレデリック」という名であったということとぐらいいである。

多くは聞き書きと抜き書きであり、総じれば「剽窃」ということになる。

過誤はすべて筆者の力不足による。

ともあれ一九八一年まで書き進めたところで、情報産業、IT産業の神話は終わる。

はるか昔、雪深い山奥の小学生だったころ、

キミはもつと本を読みなさい。なかでも辞書を読みなさい。

と教示してくれた渡辺嘉彦師に感謝する。でき得れば、生前に本書を届けたかった。

二〇〇〇年の五月、三十六年ぶりに再開した多くの旧友に感謝する。自分探しの旅がそこから始まった。

こんなもの、誰が読むんだ。

といいながら、ひそかに応援してくれた人々に感謝する。さぞかし呆れたであろう。

二〇〇三年一月に物故した田部雄三氏に感謝する。二十余年のときをかけてその背中を追ってきたが、年齢の差だけはどうにもならなかった。良きにつけ悪しきにつけ、継続することを学ばせてもらった。

取材を通じて話を聞いた人たちの中には、ケネス・オルセン、チャールズ・シモニー、ビル・ゲイツ、アラン・ケイ、スコット・マクネリ、ジェームス・マーチン、リチャード・ストロスマン、ステイブ・ジョブズ、ボブ・ヤン

グ、李龍兌、李東郁といった海外の人がいる。

あるいは北川宗助、金岡幸二、塚本祐造、大川功、西尾出、佐藤雄二郎といった、いまはなき人々へのインタビューも記憶に新しい。その声音や息遣い、表情、身振り手振りを思い出しながら、書いた。

本書のために貴重な時間を資料を提供していただいた多くのの方々に感謝する。ややもすれば筆者は愚問を発し、数々の失礼があつたやもしれない。

執筆の途中、数々の誤謬を指摘していただいた多くのの方々に感謝する。各位の叱責と激励がなければ、ここまで書き進めることができたかどうか。

さらに言うと、ホレリス式電動パンチマシンがアメリカから横浜港に到着してから百年目という節目の年、時空に埋もれていた本書を掘り出して公開する場を用意してくれた日本オープンソース・ソフトウェア協会に感謝する。これで本書は再び読者の目に触れるに違いない。

四

最後をどのように締めくくるか、やや悩んだ。小説であれば、なにがしか劇的な終章を用意するところかもしれない、およそ作家というものは書き始めるときにそれを想定する。

だが本書はそのような準備がないまま、大洋に漕ぎ出してしまった。

語り残した神話は、服部正という人のことである。

そもそもは構造物の設計者であつて、構造解析の計算を行うためにIBM社の電子計算機を使った。そのことが、ソフトウェアの価値に目を向けるきっかけになった。しかるにソフトウェアという、目に見えない無体物を軸とする価値世界を創出せんとした。

一九八三年の一月二十九日、神話の最後を飾るこの人物は静かに去つた。

世界情報処理産業会議を東京で開く。

それを機に業界団体の統合を実現する。

この遺志は多くの人に受け継がれ、実際、その通りになった。ソフトウェア産業振興協会と日本情報センター協会が合併して情報サービス産業協会が発足したのは一九八四年五月、世界情報処理産業会議が東京・西新宿で開かれたのは同年六月だった。そのいづれにも筆者は、中の人々に準じる位置で立ち会った。

服部の提唱で始まったソフトウェア・シンポジウムは、情報サービス産業協会発足のあとソフト協技術委員会を母体に発足したソフトウェア技術者協会（SEA）に引き継がれ、こんにちまで連続と続いている。

——本書の続編を。

という声がないでもなかった。

筆者においても、一九八〇年代のUNIXユーザ会、SEA、ソフトウェア・デザイナーズ・アソシエーション（SDA）の航跡をたどる『日本IT続紀』を構想したこともあった。

本書に登場した神々が共有した場所や事象が、すでに多くが地上から消え失せている。だがその一方で、新しい資料が公開され、十年前、二十年前には分からなかったこと、明らかにされていなかったこと、知る術がなかったことを探求する環境が整っている。

——残るのは歳月のみである。

——という言い方を、筆者は否定せざるを得ない。

以後のことはつまり、われらが時代にはかならない。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

ESDラボラトリ 社名は「[Electronics Systems Development]」に由来する。マイコンを応用した計測機器を販売していた。創業者・水島敏雄が一九七七年四月、サンフランシスコで開かれた西海岸コンピュータ・フェア (West Coast Computer Fair: WCCF) でステイブ・ペン・ジョブズと知り合ったのをきっかけに、アップル社の代理店となった。

BMCインターナショナル 一九七六年に設立され、外国製卓上型電子計算機やキャッシュレジスターの輸入販売を行っていた。その後、取り扱い製品をオフィス向け電子機器に広げている。

**探求する環境** 例えば二〇〇〇年代前半のインターネット環境がある。通信容量ばかりでなく、海外版 Wikipedia の参照、検索システムや機械翻訳システムの利用などがある。また情報公開の考え方が広まり、政府機関や研究機関が所蔵する図書・資料、論文の参照が可能になった。本編 (OSSA I 版) でも二〇〇四年当時知りえなかった情報のいくつかを新たに盛り込むことができた。

## 232 解題

第二百三十二

解 題

一

序 叙

はじめに

〈序〉は「並び」「順番」「申し述べる」のほか「次第」「はじめ」の意、〈叙〉は「抒」「敍」に通じ「述べる」の意。総じて「ゆるゆると順を追って語る」。ないし「ありのままに述べ記す」。

二

溟 滓

ほのか／くくもりて

『日本書紀』卷第一「神代上」第二段「古、天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓而含牙」（古へ、天と地は未だ割れず、陰と陽は分れず、混沌として鷄子の如く、溟滓（ほのか）に牙を（きざし）含めり）。天地開闢の段。溟

はほのかで暗く、よく見えぬさま、滓は水の様子。ものの香などのこもったさま。上古の人びとは霧のかかった薄暗がりに神秘性、神性を見出していたことがわかる。

『古事記』は本文でなく太安万侶が上奏したときに添えたとされる「并序」に「夫混沌元既凝 氣象未効 無名無爲誰知其形然乾坤初分參神作造化之首」と記し、混沌とした宇宙が固まりはじめ天と地に分かれたとする。

契 機

きざむ

〈契〉は「しるしを付ける」の意、「機」は「はずみ」「きざし」。動的・過程的な状況下において次の発展を生み出すのに必須の段階・局面を言う。物ごとを始める手がかかり、きっかけ、動機のこと。

鷄 子

とりのこ

『日本書紀』卷第一「神代上」第一段「古、天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓而含牙」。鷄の卵を溶き混ぜたとき黄身と白身が成すさまを渾沌に喩えた。

ほぼ同時期の成立とされる『古事記』（太安万侶、和銅四年）はその冒頭「天地初發之時、於高天原」で始めてい

て、最初から高天原が存在していたことになっている。

### 薄 靡

たなびく

『日本書紀』卷第一「神代上」第一段「及其清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難」(その清陽(すみあき)らかなるは薄靡(たなび)きて天を爲し、重く濁れるは淹滯(つつ)いて地と爲るに及びて、精(くは)しく妙(たへ)なるが合へるは搏(むらが)り易く、重く濁れるが凝りたるは竭(かたま)り難し)。天地開闢のとき、鶏の卵を溶いたように混沌とした気が、渦を巻いて立ち上り、あるいは下方に沈んで、天と地を形作っていくさまを描いた。薄靡は夜明け間際、山の端にかかる薄雲が曙光を受けてかすかに茜色に染まるさま。

### 三

### 未 剖

いまだわかれず

『書紀』卷之一「神代上」第一段「古、天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓而含牙」。原始に天と地は暗い闇に覆われた液状の渾沌を成していたとする。

### 曙 光

あけぼの

〈曙〉は「あけぼの」、〈光〉は儿(見)と火で成り「小さなあかり」。夜明け間際、東の空にさすかすかな太陽の明かりのこと。物ごとの前途が開きはじめてたこと。

### 爨 黓

あいたい

〈爨〉は「雲がゆったりとたゆたう」さま、〈黓〉は「雲が重なり合う」さま。総じて「雲が重なりたゆたう」さまを指す。爨は二十五画、黓は二十三画で漢字二文字の熟語としては最も画数が多い。

### 游 魚

あそぶいを

『日本書紀』卷第一「神代上」第一段「開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也」(開闢の初め、洲壤(くにつち)が浮き漂ふこと譬(たと)へば遊ぶ魚(いを)の水の上)に浮けるが猶(ごと)し)。天地開闢のとき土が浮漂していたとする形容。

四

合 牙

きざしふくめり

『日本書紀』卷第一「神代上」第二段「古、天地未剖、陰陽不分。渾沌如鷄子、溟涔而含牙」。牙は「芽」に通じ「きざし」の意。

乾 坤

けんこん

『日本書紀』卷之一「神代上」第三段「凡八神矣、乾坤之道相參而化、所以、成此男女」（凡（およ）そ八神は、乾坤の道が相參じて化（な）る、此て男女と成る所以（ゆえん）なり）。『古事記』上卷并序では「あめつち」と訓ませている。

八卦で乾は「天」であり「陽」、方位は「北西」、坤は「地」であり「陰」、方位は南西に配される。初生神三代のあとに誕生した四世代八神は、乾坤・陰陽・天地が相參して（入り混じって）誕生したので、男女一対なのである、という説明。

『書紀』『古事記』の神々は男女一対、かつ生と死を体

現しているだけでなく、お墓まで用意されている。「乾坤一擲」はすべてをかけて一度の賭けに出ること、のるかそるかの大勝負を意味する。

重 濁

おもくにござる

『日本書紀』卷第一「神代上」初段「及其清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地」（それ清陽（すみあき）らかなるものはたなびきて天と爲り、重く濁れるものは淹滯（つづ）ゐて地と爲るに及びて）。

天地開闢のとき重なり合った雲が棚引くような混沌が渦を巻き、透明で明るい気は立ち上って天となり、重く濁った気は下方に沈んで地となった、という。

修 羅

しゅら

『山家集』に「修羅よしなしな争ふことを楯にして瞋（いかり）をのみも結ぶ心は……」とある。仏教にいう十界の四位四番目で、妬み・誤解・裏切りなどによって戦いや争いが絶えない世界。仏教・七部衆の一である戦闘の神・阿修羅に由来し、帝釈天と激闘した場合は「修羅場」と呼ばれる。

古墳や城を築く際、大きな石を運ぶ槿を「修羅」と呼ぶのは、大石を「たいしゃく」と読んで帝釈天にかけ、阿修羅がその帝釈天を動かしたからという。

五

淹 滞

つついて

『日本書紀』巻第一「神代上」第一段。「及其清陽者、薄靡而為天、重濁者、淹滞而為地」(それ清陽(すみあき)らかなるものはたなびきて天と為り。重く濁れるものは淹滞(つつ)ゐて地と為るに及びて)。淹滞は「水中に閉じ込めて身動きが取れないようにする」の意。転じて「とどこおる」。

焦 土

やけつち

『日本書紀』巻第一「神代上」第五段「伊弉冉尊、爲軻遇突智、所焦而終矣」(伊弉冉尊、軻遇突智(かぐつち)の為に焦け終に矣となる)。国産みの最後にイザナミが火の神「カグツチ」を産んで焼死した。

イザナギは怒ってカグツチを斬り、そこから水の神(閻

湍加美神、閻御津羽神)、甕の神(甕速日神)、山々の神(八神の山津見神)が派生したとするのは、人が火を自由に操ることができるようになって、金属と土器を得たことを示している。

地 定

ち・さだまる

『日本書紀』巻第一「神代上」第一段「精妙之合搏易、重濁之凝竭難、故天先成而地後定」(精しく妙なるが合へるはむらがり易く、重く濁れるが凝りたるはかたまり難し。故、天まず成りて地のちに定まる)。

「故天先成而地後定」は中国古典『淮南子』(天文訓)に依拠する。『書紀』は「地後定」としながら「便化爲神、號國常立尊」便(すなは)ち神に化為(な)る。國常立(くにのとこたち) 噂と號す)と、地上の神が最初に生まれたとする。対して『古事記』は「天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神」と記し、天地開闢のときすでに高天原が存在し、そこに初神「天之御中主」が誕生したとする。

滴 瀝

したたる



『日本書紀』卷第一「神代上」第四段「其矛銚滴瀝之潮、凝成一嶋、名之曰礮馭慮嶋」(其の矛銚より滴瀝し潮、凝りて一嶋と成る、之の名を礮馭慮(おのごろ)嶋と曰ふ)。海に突き刺した矛の先からぼたりと落ちた潮が最初の島となった。すなわちオノゴロ島である。

『古事記』大雀大王(仁徳)記に「淤能碁呂志摩」とあり、淡路島の南に浮かぶ沼島と比定する意見と、高松市屋島とする説がある。

六

揺 籃

ゆれる／ゆらぐ

〈揺〉は「ゆらぐ」、〈籃〉は竹かごのこと。総じて乳児を入れて揺りあやすかごを指す。転じて物ごとが生じて初期の成長・発展をとげる期間。

秉 炬

たひ

『日本書紀』卷第一「神代上」第五段「陰取湯津爪櫛、牽折其雄柱、以為秉炬」(陰に湯津爪(ゆつつま)櫛を取りて、其の雄柱を牽き折きて秉炬とし)。湯津爪櫛は聖な

る櫛、雄柱は串の両端の大きな歯のことで『古事記』は「男柱」と表記する。その雄柱を引き抜いて灯りとした。秉炬は「手に持つ火」、すなわち松明のこと。黄泉の国の伊奘冉尊を訪ねた伊奘諾尊が一目伊奘冉尊を見ようと暗闇の中でこっそり松明を点けたときの描写。

葦 牙

あしかび

『日本書紀』卷第一「神代上」第一段「于時、天地之中生一物。状如葦牙」(時に天地(あめつち)の中に一つ物生(あ)れり。かたち葦牙の如し)。「

牙」は先端が尖った三角推の形状をいい、これが動物の歯(牙)として定着した。ここでは稲の穂先(穎)のこと。天地開闢のはじめに葦の芽が誕生するのは、まず稲系植物を神格化したことを示している。

氣 噴

いふき

『日本書紀』卷第一「神代上」第六段「而吹棄氣噴之狭霧所生神、號曰田心姫、次湍津姫、次市杵嶋姫」(吹き棄(う)つる氣噴(いふき)の狭霧(さざり)に生まるる神、號(なづ)けて田心(たごり)姫、次に湍津(たぎつ)姫、

次に市杵嶋（いちきしま）姫と曰（まう）す。天照大神が素戔嗚尊の十握剣から三女神を生み出す描写。

息が生命を意味することから、それを剣に吹きかけ神を生む呪術的行為をいう。田心姫、湍津姫、市杵嶋姫は宗像三女神のことで、神社に祀られた最初の神々とされる。

七

明 彩

うるはし

『日本書紀』巻第一「神代上」第五段「此子、光華明彩、照徹於六合之内」（此の子、光華（ひかり）明彩（うるはし）くして、六合（くに）の内に照り徹る）。天照大神が生誕したときの描写で、「光華明彩」の四文字に華嚴経の影響を指摘する学説もある。

六合を「くに」と読むのは東西南北・天地の合わせた全宇宙。全世界の意味。

「六合」は『書紀』巻第三「神武天皇」紀「當足以恢弘大業・光宅天下、蓋六合之中心乎」「然後、兼六合以開都、掩八紘而爲宇、不亦可乎」とあって、『書紀』における建国定都譚においては畝傍山の山上から遠望した限り一帯が「國」、その東南の檜原が「國之埴區」（けだし國の埴區

（もなか中心）だった。

浮 寶

うくたから

『日本書紀』巻第一「神代上」第八段「韓郷之嶋、是有金銀、若使吾兒所御之國、不有浮寶者、未是佳也」（韓（から）の郷の嶋には是金銀有り、若使（たとひ）吾が兒の所御（しら）す國に、浮寶あらずは、未だ佳（よ）からじ）。浮寶は舟のこと。

書紀は「一書に曰く」で素戔嗚（すさのう）は五十猛（いたける）神を率いて新羅国に降臨し、この国に舟がないのはよくないことだ、といって杉、檜、椴、櫟、樟などの木を植えたという。この伝承が史的事実を反映しているとすると、スサノオの一族は朝鮮半島から日本列島に渡来したことになる。

顕 見

うつしき

『日本書紀』巻第二「神代上」第八段「夫大己貴命、與少彦名命、戮力一心、經營天下。復為顕見蒼生及畜産、則定其療病之方」（夫れ大己貴命（おおむなちのみこと）と少彦名命、（すくなひこなのみこと）力をあはせ心を一に

して天下を経営（つく）る。また顕見蒼生（うつしきあを  
ひとくさ）および畜産（けもの）の為は、その病を療むる  
方（みち）を定む。

顕見蒼生は大己貴すなわち大国主の命に従う民のこと。  
国津神による国土平定伝承の部分。

## 周 流

めぐりあるく

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段「以岐神為郷導、  
周流削平」（岐神（くなど）を以って郷（くに）の導きと  
して、周流（めぐりある）きつつ削平（たひら）ぐ。中  
国古典『文選』上林賦「周流長途中宿」。周流は「長行し  
紆余曲折」の意。

八

## 宜 試

ぎし／こころみたまへ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段「僉曰、天國玉之  
子天稚彦、是壯士也。宜試之」（みな曰さく、天國玉の子  
天稚彦、これ壯士なり。試みたまへ）。宜試は「宜しく試  
みる」。天稚彦の読みは「アメワカヒコ」、若くて立派な男

子の意味。

## 先 驅

さきはらひ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段一書第一「先  
驅者還白、有一神、居天八達之懼」（先驅の者還りて白さ  
く、一の神有りて、天八達之懼に居り）。天孫降臨のとき、  
先驅けの者が天八達之懼（あめのやちまた）に一人の神が  
いると報告した。

ヤチマタは道が多く集まり分岐する場所、すなわち都市。  
八衢、八街とも。魏志倭人伝に見える「邪馬台国」はその  
音を写したものとする説がある。

## 稜 威

いつ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段一書第一「皇孫於  
是、脱離天磐座、排分天八重雲、稜威道別道別而天降之也」  
（皇孫ここに天の磐座（いはくら）を脱離（おしはな）ち、  
天八重雲を排分〓おしわ〓けて、稜威の道別きに道（ち）  
〓別（わ）きて天降ります）。地上を支配すべく高天原か  
ら天孫が降臨していくときのさま、稜威は『書紀』卷第一  
第五段に見える「湯津」に通じ、「神聖なるもの」の意。

## 覓 國

くさまぎ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段一書第四「而簪空之空國、自頓丘覓國行去、到於吾田長屋笠狭之碕矣」(簪空(そし)の空國(そらくに)を頓丘(ひたを)から覓國(くにま)ぎ行去(とほ)りて、吾田の長屋の笠狭の碕に到ります)。日向の襲の高千穂の峰に降り立つた天孫が「簪空の空國(荒れ果てて空しい地)を通り過ぎ、めぐりにめぐって吾田の長屋の笠狭の碕に到着した」という一文。

『書紀』本文中の注に「頓丘、此云毗陀烏。覓國、此云矩貳磨儀」(頓丘これをヒタヲ、覓國これをクニマギと云う)とある。「覓」は「住むのに適した地を探して歩き回ること」の意。

## 九

## 玉 鏡

たまのはり

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第二「于時、海神之女豊玉姫、手持玉鏡、来将汲水」(時に海神(わたつみ)の女豊玉姫、手に玉鏡(たまのはり)を持ちて来たり

て將に水を汲まんとす)。古くは西域に産した玉石を剝り貫いて作った碗のこと。訓「はり」は水晶のこと。

玉石は主に緑色透明度が高く、磨くと光沢が出た。なかでも中国大陸の王朝ではが好まれ、それが西域との交易路を開ききっかけになったとされる。日本列島に水稲耕作の技術を持った人々が渡来したのは、日本海の浜辺に産する翡翠の採取が目的だったかもしれない。

## 秀 起

さきたつ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段一書第六「其於秀起浪穂之上、起八尋殿、而手玉玲瓏、織經之少女者、是誰之子女耶」(かの秀起(さきた)つる浪穂の上に八尋殿を起てて手玉(ただま)も玲瓏(ゆら)に織經る少女はこれ誰が子女ぞ)。

手玉は「手首につけた玉石の飾り」、玲瓏は「玉のように輝き透き通ったさま」「玉が触れ合ってたかなでる美しい音」。八尋殿(火瓊瓊杵(ほのになぎ)尊と木花開耶(このはなさくや)姫が新婚生活を送った大きな屋敷)で美しい音を立てて機を織っているのは誰の娘だ？

木花開耶姫は桜の精で、桜が咲くころになると水田の水の温度が田植えに適するようになることから、水稲耕作民

が神として祀った。

「玲瓏」は「玉のように美しいさま」

### 纏綿

むつまか

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第三「海神則以其子豊玉姫妻之。遂纏綿篤愛、已經三年」（海神、則ち其の子豊玉姫を以て妻せまつる。遂に纏綿（むつまか）に篤愛して已に三年に經りぬ）。

纏綿は「こまやかで親しみ愛しむさま」。

彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）が海の底の海神（わたつみ）の宮で豊玉姫と三年を過ごし、彦波瀲（ひこなぎさ）武（たけ）鷓鴣（うがや）草葺不合尊（ふきあえずのみこと）（神武天皇の父）が誕生する。この物語が「浦島太郎」の原型となった。

### 侍者

まかたち

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第三「時有豊玉姫侍者、持玉鏡當汲井水」（時に豊玉姫の侍者（まかたち）有りて、玉鏡（たまのはり）をもちて當に井の水を汲まむとするに）。侍者は「上の者の意のままに動く者」の

意。

海神の宮殿に迷い込んだ彦火火出見は虚空津日高（虚空彦・そらつひこ）と呼ばれるようになり、泉のほとりで豊玉姫と出会うことになる。

十

### 迅風

はやかせ

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第四「弟居濱而嘯之。時迅風忽起、兄則溺苦」（弟、濱に居しまして嘯（うそぶ）きたまふ。時に、迅風忽（たちま）ち起こりて、兄則ち溺れ苦む）。

弟（陸上の王・彦火火出見（ひこほほでみ）尊）が浜辺で呪文を唱えるとたちまち強風が吹き、兄（海人の王・火（ほ）闌（すそ）降（り）命）が乗った船が転覆して、兄王が溺れた、という描写。

火の神を産んだことで命を落としたイザナミの子孫の敬称に「火」が付せられるのは、五行思想の赤につながり農耕・医薬・火の神である炎帝が先祖とする漢帝室の思想が影響している。「火」（転じて「日」＝太陽）が大和王統の姓だった可能性を示唆している。

## 懊 惱

なやむ

『日本書紀』卷第二「神代上」第五段一書第四「且生火神軻遇突智之時、悶熱懊惱」(火神軻遇突智(かぐつち)を生まむとする時に、悶熱(あつか)ひ懊惱む)。ここでの懊惱は「思い悩む」ではなく「絶叫をあげて苦しむ」の意。

死に際してイザナミは鉞物の神(金山彦、金山姫)土の神(埴(はに)山(やま)姫)、水の神(罔象女(みずはのめ)神)を産み、ハニヤマ姫の孫が食物神(豊宇氣毘売)となる。

## 草 昧

くらしき

『日本書紀』卷第三「神武即位前紀」第一段「是時、運屬鴻荒、時鍾草昧」(是の時に、運(よ)、鴻荒(あらしき)に屬(したが)ひ、時、草昧(くらしき)に鍾(あた)れり)。

鴻荒は「太古」、草昧は「モノの始めていまだ闇のとき」のこと。ともに中国古文書『文選』からの引用。

## 連 屬

れんぞく

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第四「汝久居海原。必有善術。願以救之。若活我者、吾生兒八十連屬、不離汝之垣邊、當爲俳優之民」(汝、久しく海原に居しき。必ず善き術有らむ。願はくは救ひたまへ。若し我を活けたまへらば、吾が生の子の八十連屬に、汝の垣邊(かきとも)を離れずして、俳優(わざおき)の民たらむ)。海に溺れた兄が弟に救助を求めた言葉。「もし自分を助けてくれたら子々孫々お前の宮のそばを離れず仕えさせよう」。

連屬は「つながる」「関係する」の意。『漢書』成帝紀に「卒徒蒙辜・死者連屬・百姓罷極・天下匱竭」(兵務や労役に服する者罪はないのに死に瀕し、百姓は疲れ果て天下は苦しんでいる)とある。

十一

## 嚇 躍

かくやく

「嚇」は周囲が恐れるほどに勢いが盛んなさま。「おどす」「大声で叱る」の意。躍は「おどる」。勢いよく遮二無二前進するさま。飛ぶ鳥を落とす勢い。

## 飄掌

たひろかす

『日本書紀』卷第二「神代下」一書第四「至膝時則舉足。至股時則走廻。至腰時則捫腰。至腋時則置手於胸。至頸時則舉手飄掌」(膝に至る時は足を舉ぐ。股に至る時は走り廻る。腰に至る時は腰を捫(もち)ふ。腋に至る時は手を胸に置く。頸に至る時は手を舉げて飄掌(たひろか)す)。  
飄掌の意味は「手のひらをひらひらさせる」さま。「捫」の意味は「なでる」「さする」だが、「捫ふ」の場合は「よじる」「ひねる」の意。

## 仙蹕

みさきはらひ

『日本書紀』卷第三「神日本磐余彦天皇」即位前紀「於是、火瓊瓊杵尊闢天關披雲路、駢仙蹕以戻止」(是に火瓊瓊杵(ほのににぎぎ)尊、天關(あまのいはくら)を闢(ひら)き雲路を披(おしわ)け、仙蹕(みさきはらひ)駢(ひ)ひて戻止(いた)ります)。

仙蹕は神聖なる者が通るとき先払いのこと。転じて七世紀に天皇の御幸を指す言葉として使われた。『懷風藻』に、伊與部連馬養(いよべノいまかい)が持統天皇にささ

げた歌「堯帝の仁智に叶い仙蹕山川を遊ぶ。豊嶺杵として極らず」がある。

## 恢弘

ひらきのぶ

『日本書紀』卷第三神武天皇即位前紀「彼地、必當足以恢弘大業光宅天下」(彼の地は、必ず以て大業を(あまつひつぎ)恢弘(ひらきの)べて、天の下に光宅るに足りぬべし)。

大業の本来の意味は文字通り「大きな事業」のこと。『書紀』編者がここに採用したのは、あるいは隋・煬帝の年号「大業」に由来するか。「光宅天下」は中国の『尚書』序文からの流用だが、『日本書紀』編纂の直近事として、大唐帝国皇帝睿宗のとき、西暦六八四年九月から十二月の三か月だけ使われた元号「光宅」がある。

233 あとがき



第二百三十三

あとがき

一

ことあるたび、

——こういう本を出したい。

といい続けているうち、気がつけば夏が過ぎようとしている。インタビュアーの結果に対して加筆修正ばかりでなく、教示をいただくことが先行して、いつまで経っても書籍が出ない。このままだと「狼少年」になってしまいそうで気持ちばかりが焦る。

いざ出版に向けて編集を始めるとさまざま迷いが生じ、かつ不足不備が目につくために改めて調べ直し、優柔不断のうちに二度三度と全面的な校訂が必要になる。書き手と編み手が同一でなければ、そのような不都合はまず発生しない。

——こうなれば目をつむって「エイヤッ」でやるしかない。

とは思うのだが、また優柔不断が頭を擡（もた）げる。

——総ページ数五千、全十巻。

という筆者の構想を商業ベースに乗せるのは、今日的情況ではどうやら無理であるらしかった。

——焦点を絞って、四分の一以下にしてみらえれば。

と某出版社の担当者は言った。

商業出版社にあつては、そもそも価値がないことになる。

——であれば。

というのが自費出版ならぬ自社出版を決意した事情である。世にある出版会社であつても、創業のときの思いは同じようなものであつたろう。

自社出版の母体であるナレイという会社について、やや補足しておきたい。（注：ナレイ株式会社は二〇一三年九月に法人登記を取り下げている）

フリーランスになったとき、偶然にも小学校時代の友人二人が同じような立場にあつた。それぞれが個人事務所を開くなら、いつそのこと共同で会社を興さないか、という無謀な発案が行われ、そこに「勢い」というものが加わって、とうとう形を作ってしまった。

その趣旨を、筆者は次のように書いた。

ナレイ株式会社は原則として、四十五歳以上のいわゆる「中高齢」のプロフェッショナル（フェロー）で構成しま

す。特定の企業内で専門職であつても、社会的・客観的に見たとき、プロフェッショナルであると認知されるかどうかのポイントです。

企業形態としては、参加する各自が各分野のプロフェッショナルとして自立しつつ連携、協業する〔アソシエイト・ファーム〕を想定しており、従つてインターネットを利活用したS O H Oが活動のベースとなります。

以下、この会社に参加するには一口の出資が必要であるとか、ポジション・ペーパーを提出しろだとか、いろいろなことを書いてある。インターネットを利活用し、ホームオフィス／オンライン・コラボレーションを企んだのは、いまから思えばやや先走りだった。

——はてこれが利潤追求の企業であり得るのか。

と、我がことながら首を傾げたくなる。

とまれ——。

情報産業とかかわるようになっておよそ三十年が経つ。それなりに分かっているつもりだったが、いざ書き始めると次から次に調べなければならぬことが出てきた。拾い上げた土塊の欠片をつなぎ合わせ、欠落を補つて復元した土器を眺め眇めつ、それが何物であるかを考え取捨する作業とはほぼ等しい。

二

足形を刻んだ平らな石を拝む風習がある。

仏足石と言われるものであつて、全国に百余を数え、天平勝宝五年の年紀を持つ奈良薬師寺のそれが最古とされる。足形があるということは、そこに仏陀が立っているのである、という信仰だが、まやかしと言い切れるかどうか。

何もない空間に、目に見えぬ何者かの姿を再現するという意味において、筆者の作業は仏足石を拝むのと似ていないでもない。

そういうことから本書は野辺の石、傍らの草ですら初源の計算の道具であつたことから書き起こし、ハードウェアとしては歯車とバネから手廻式機械装置、蒸気機関、電動機械装置まで、時間的には太古から昭和の終盤までを扱つた。

いつ、誰が、どのような機械装置を作つたか、何年の何月に誰が何をしたかという、暗記することが知識の習得であるかのような空しい歴史の授業でなく、あるいは仏足の形状を個々に分析するのでなく、そこに人々の息遣いが存在する——と読者諸氏が感じていただけたら、まず第一の目的は達せられる。

第二には、それは筆者の興味を惹いたことでもあるのだが、近代計算機械装置を使いこなすには「表」と「統計」の概念が必要だった。杉亨二という人物がその概念をうち立てた。

次に計算の仕事に機械装置を使うに際して漢数字からアラビア数字への転換という大きな意識改革があった。このことはあまりに当たり前すぎることで、存外に忘れ去られている。

古今風の浪漫主義を否定し万葉風の写生主義を唱えた正岡子規は、門人の句を評するのにアラビア数字で点数を付けた。句会においては総当りの星取りのような採点表を考案して、その集計はアラビア数字で行い、順位は漢数字で示した。明治から大正期にかけての和洋混淆はそんなところにも現われていた。

前島密という開明者が考案した郵便貯金の制度がなければ公文書にアラビア数字の表が採用されるのが遅れ、計算機械装置の普及にいましばらく時間がかかったかもしれない。

第三に、昭和初年にいたるまでの期間、経済環境の変動はいま以上に激しかった。欧米列強諸国と徳川幕府が結んだ不公平な金と銀の交換比率に基づく協商協定、金本位制から信用貨幣へ、国内資本の形成と蓄積から海外への投資

というプロセスにおいて、事務機器を輸入するに際して関税の問題が生じ、国産品愛用運動が政府の主導によって展開されたというあたりは、ついで一九七〇年代以後の軌跡と重なるようである。

### 三

本書を刊行するに当たって、様々な新しい経験をした。まず、編集の問題があった。

本文より補注を加えたり参照した文献やホームページのURLを再度調べるのにたいそう手間を取った。かつ、全体をどのように構成するか、迷うことが少なくなかった。それぞれの分量がまちまちでは、刊行を終え、書架に並んだときおかしなことになるであろう。

次に体裁という難問があった。表紙に張る布の色、織目、カバーのデザイン、本扉にワンポイントの図柄を入れるか入れないか、はたまた本文に使用する紙の色合いや斤量……。

それまで雑誌や年鑑ものは手がけたことがあったにせよ、新聞という決められた紙面と限りある記事の分量を前提としたルーチンの編集が中心だったから、いかさま戸惑った。家を建てるとき躯体の設計はできているのに壁紙や台所

の器具、照明などがなかなか決められないのとよく似ている。

それが終わったと思う間もなく、出来上がった書籍の販売に伴う在庫管理、発送事務、どうやって予約を受けるか、請求書、領収書をどうするのか、残る四分冊の印刷経費をどう捻出するかといった課題が浮き上がった。

こういうことには全く素人なので、手違い・間違い・勘違いを繰り返しつつ、ようやく一つの仕組みが出来上がった。

なるほどこういうことであれば、既存の商業出版社に任せるのが得策だったかもしれないが、インタビュをさせていただいたり資料を提供していただいた方々に直接、

「おかげさまでこのような本になりました」と手渡して行きたい気持ちがあった。

とはいえ、本書は日中戦争、太平洋戦争、後編が戦後復興と経済成長の物語など紆余曲折がおり混じって、インタビュの成果をあまり反映できていない。

ただ、イギリスに生まれたランチェスターの法則がアメリカに渡ってOR（オペレーションズ・リサーチ）の手法を生み、それが計算機によって具体化したこと、計算機の技術によって生成された暗号が同じく計算機によって解読され、計数処理に基づくシミュレーションが行われ、連合

国軍なんかなくアメリカ合衆国軍が的確に日本の工業生産力を解明していくプロセスは興味ふかい。

さらにいえば終戦後の国産電子計算機開発は多くの挑戦者によって担われ、そのコロロザシが政策を動かし産業の発展に結びついた。器具もなく道具もなく、文献のみを手がかりに半導体を作り出していく研究者の姿は、明治・大正期に計算機の国産化を考えた川口市太郎、大本寅次郎などと見事に重なっている。

#### 四

全くの偶然で、旧版の第一分冊を刊行したのは二〇〇四年度情報化月間の初日だった。そのことを話すと、日本情報処理開発協会の河端照孝特別顧問が早速推薦文を書いてくださり、加えて同協会会長の児玉幸二氏に「情報化推進国民会議議長」として一文を寄せていただく手配までしていただいた。

児玉氏は最初、

——キミと初めて会ったのは、ボクが情報振課の課長のことだったかな。

と、やや誇張気味にさかのぼる口調だった。

のち本庁の玄関で公用車から出てきた通産省事務次官とし

ての兎玉氏とバツタリ出くわした。

「よお、生きていたか。最近、とんと顔を出さないな」

「局長や次官からはホットな情報は貰えませんがね」

というような会話を交わした記憶がある。

生意気であった。

「情報産業の方向性について話すことぐらいはできるさ。

思いはキミと同じだ」

という言葉に感じるものがあつた。

そのときのことを同氏も覚えていてくれた。

課長時代にも兎玉氏は

——ソフトウェアの価値をどう評価するか、そのためには法的保護や知的財産の認識を産業界に訴えなければならぬ。それを適正に施策化することが日本の国際的地位を高める。

という考え方を明確に示していた。それは現在も変わりが無い。

——官僚。

この言葉は、ある特殊な意味を伴って使われることがある。

だが、初代電子政策課長の平松守彦氏を筆頭に、情報産業にかかわる政策マンは熱心に業界の声に耳を傾け、徹夜も辞さず「日本」のあるべき姿を懸命に模索していた。

彼ら政策マンが自分達の居場所を「エレムコ」(エレベーターの向こう側)と呼び、テレビドラマ『若者たち』の主題歌「君の行く道は果てしなく遠い……」を咆哮し、省の読みに濁点を加えて「ツウジョウ残業」省と自嘲したのは、その裏の矜持と表裏の関係にある。

筆者のような一介の業界記者に対してさえ、政策マンたちが情報産業の未来を語るとき、その熱い思いがひしひしと伝わってきた。

八四年に社団法人ソフトウェア産業振興協会と社団法人日本情報センター協会が合併して情報サービス産業協会が発足した。その前夜——まさに記者会見の前日の午後——通産省旧本館の五階で練り広げられた喧々諤々の議論が、端的にそれを示している。

ときの課長・柴崎徹也氏を中心に若手政策マン、ソフト協とセンター協の幹部たちが鳩首して机を叩き、「情報サービス産業の将来」「ネットワークとソフトウェアの時代」を論じていた現場に、筆者はたまたま居合わせた。

そういうったこととは稿を改めるべきであろう。

卷十三「乗炬」以後では主に一九六〇年代の出来事を描く。IBM社との基本特許問題、国産電子計算機の開発、産業界における新しいビジネスモデルと情報の活用、さらに受託計算センターやソフトウェア業の成立といった話柄

が陸続と出てくる。

ある一定の年代の人々にとっては、まさに「我らの時代」であろう。その熱気というものを、少しでも伝えることができれば筆者の目論みはまず一つ達せられる。

## 五

二〇〇五年一月二十日、東京・虎ノ門の某所。

会合は「午後六時半から」ということだった。だが、刻限が近づいても受付を通過した人の数はまばらで、案内に立つ係の人に慌てた風もない。

——これは自分が時間を間違えたのではないか。

筆者はロビーのソファに座りながら、ひそかに疑っている。

そのうち何人かが連れ立つガヤガヤとした空気が生まれ、元知事が姿を現した。

元知事というのは平松守彦氏である。

「よお、来とったか」

相変わらず血色がよく、声に張りがある。

「とりあえずご挨拶だけ」

会の正式なメンバーではないので遠慮しようとする、元知事は言った。

「なに、構わん。一緒に来たまえ」

会場に入った数分後に元知事による挨拶は終わり、乾杯となった。実際に始まったのは七時に近かったが、気が知れているからか、手際よく会が進んでいく。

「電政会」の新年会なのである。通産省機械情報産業局電子政策課のOB・OG会。一九六〇年代末から七〇年代初期に活躍した廣田慶次郎氏、坂尾彰氏といった古豪に混じると、林量造氏や澤昭裕氏、藤原達也氏などは、若手に入るらしい。

元知事はその会長を務める。

——ゲンエキはどうした。

——彼らはまだ仕事でしょう。

——相変わらず濁点だな。

ゲンエキとは「現役」、濁点とは「通商産業省」に濁点を付けて読むと「ツウジヨウ・ザンギョウ（通常残業）省」になることを指している。現役の職員たちは来年度施策の詰めに追われているのに違いない。

ややあってドヤドヤと若いゲンエキたちが流れ込んできた。

——これで揃った、揃った。

——じゃ、歌にしよう。

待ちかねていたように声が上がった。

——さ、みんな肩を組むぞ。

カラオケの演奏が流れる予定だったらしいが、何の手遣いか、会場側が用意したのは「明日に架ける橋」だった。ワツと笑いが起こった。

——いいさ、音楽なんかなくなっちゃって。

——そうですよね。

——じゃ、行くぞ。

号令がかかった。

時ならぬ咆哮が始まった。

居合わせた全員が肩を組み、左右に体を揺すって、エレムコの唄を歌う。世の中では「若者たち」の名で通っている。現在は経済産業省商務情報政策局情報政策課と名称を変えているが、なるほど、エレムコの伝統は健在なのだ。

## 六

編集に当たって、筆者はやや混乱を起こした。

第百一「国産メーカー」のあたりから、気持ちの上では「一九六〇年代後半のことを書き連ねる」つもりなのに、つい五〇年代の話に戻ったり七〇年代に飛び、さらには八〇年代のことまで触れてしまう。そういう部分が少なくな

かった。

あるところは意図して書き、多くは書いたあと、残すべきか削るべきかを悩んだ。読者にあつては「いい加減にして」と言いたくなるに違いない。

第百七十九「赤軍」以後は一九七〇年代のことごとを扱った。赤軍派のこと、三島由紀夫のこと、ドルシヨック、オイルシヨックのこと。そうした中に登場したIBMシステム/370の衝撃と国産コンピュータ・メーカーのグループ編成、ソフトウエア・モジュール技術開発プロジェクトのこと、通信回線の第一次開放とDIPSのこと。

そういうことを話したとき、某氏から

——それじゃ八〇年代からあとのことはどうなるんだ。

という指摘を受けた。

——ですから、いま出している『日本IT書紀』は第一部ということになって、それで「通史要覧」という副題を付けているわけでして……。

答えると某氏は形相を変えた。

筆者の言葉を解釈するのにはしばらく時間がかかった。

氏は気を取り直して、言った。

——ということとは、だな。

——そうなんですよ。八〇年代のことは『日本IT後紀』、九〇年代のことは『日本IT続紀』というような夕

イトルにしてすね、それぞれ五分冊で書こうかな、と。

細かく説明するまでもなく、氏は呆れた。

考えてみれば、一分冊当たり六百ページ、それを合計十五冊となると、とうてい読みきれものではない。いや物理的にいえば、読みきることはできるかもしれないが、まずその意欲を失う。

——索引があるといいですね。

というご指摘もいただいた。

一人で作っているのです、しばらくお時間を、というのが筆者の答えだった。何もかもいっぺんにできるものではない。いやそれ以上に資力、体力がもつかどうか——と内心で呟きながら、時が過ぎて行く。

また無茶を働くかもしれないが、それはそれ。

なにまれお読みいただければ多謝とするところである。



# 日本IT書紀 12 補追 結

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。